（図書紹介）

田中 萬年　著

『奇妙な日本語「教育を受ける権利」　―誕生・信奉と問題―』

丸山　剛史（宇都宮大学）

本書は、わが国の職業訓練カリキュラム史研究者であり、本学会前会長でもある田中萬年氏によるわが国の「戦後教育学」批判の書である。日本国憲法にも明記されている「教育を受ける権利」に特に注目し、これにかかわる「教育」概念、「教育権」概念を問い直しつつ、「教育を受ける権利」論の展開により「職業・労働が忌避される教育観が醸成されている」ことを論じている。氏は「教育学で職業訓練を整理すれば職業訓練の問題は解決できるのではないか」と教育学に期待したものの、「研究を進めるほどわが国の教育学には裏切られるばかり」であったと述べ、教育学に疑念を抱くようになった。そして「戦後教育学」において「前提」とされ、憲法改正論議でも「温存」されている「教育を受ける権利」に注目し、同権利の成立過程を取り上げながら「戦後教育学」に対する批判が試みられている。本書記載の内容は、田中氏がこれまでに「知り得た『教育権』論に関するエッセンスと言えるもの」とされ、本書はいわば、田中氏の「教育を受ける権利」論批判、「戦後教育学」批判の集大成ともいえる著書である。本書の内容構成は以下のとおり（「まえがき」、「あとがき」、各編の「まとめ」を除く）。

第一編　「教育を受ける権利」の誕生

1.「教育」は明治政府の官制語だった

2.福沢諭吉は「発育」であるべきと主張した

3.ヘボンは「教育」を“education”としていなかった

4.片山潜が「教育を受ける権利」を言い出した

第二編　「教育を受ける権利」の信奉

5.GHQが参照した「憲法草案要綱」には「教育」が無かった

6.マッカーサー草案には「教育を受ける権利」は無かった

7.佐々木惣一は「教育を受けるのは権利か」と質問した

8.「世界人権宣言」は「教育を受ける権利」ではない

9.「教育権」等の言葉の創作で混乱させている

10.マルクス言説が創作され、批判されていない

第三編　派生している問題

11.個性が無視され横並び人間観が醸成されている

12.「普通教育」が信奉されている

13.職業・労働を忌避する教育観が醸成されている

第一編では、「教育」の用語使用の経緯を確認した上で「教育を受ける権利」論の創出を検討し、「『教育を受ける権利』の語句は戦後の『日本国憲法』に初めて規定されたのではなく、『教育勅語』下で既に主張されていた」ことを指摘するとともに、「『教育を受ける権利』と徒弟制＝職業教育訓練批判と一体的に理解されることになった」ため、「『教育を受ける権利』の主張はわが国で職業教育訓練を批判することと裏腹な関係が醸成された」と結論づけている。

第二編では、「教育を受ける権利」論とこれを支えた「教育権」論、特に堀尾輝久氏の「教育権」論を検討し、同氏は「原文を正しく紹介し」ていない、「読者を惑わす論述が混合してい」る、「その美辞麗句とレトリックにより結局は国民に幻想と誤解を与え」たのではないかと問題提起している。

第三編では、「派生している問題」として、「個性が無視され」、「『普通教育』が信奉」され、「職業・労働を忌避する教育観が醸成されている」ことが指摘されている。

氏は、1995年に博士学位論文「わが国における公的職業訓練とそのカリキュラムの歴史的展開に関する研究」をまとめられた頃から、本書に結実する「戦後教育学」批判を開始した。関連図書だけですでに6冊（『生きること・働くこと・学ぶこと　―「教育」の再検討―』（燭台社、2002年）、共編『働く人の「学習」論　―生涯職業能力開発論―』（学文社、2005年）、『教育と学校をめぐる三大誤解』（学文社、2006年）、『働くための学習　―「教育基本法」ではなく「学習基本法」を―』（学文社、2007年）、共編『非「教育」の論理　―「働くための学習」の課題―』（明石書店、2009年）、『「職業教育」はなぜ根づかないのか　―憲法・教育法のなかの職業・労働疎外―』（明石書店、2013年））になる。

研究者人生の後半生は「戦後教育学」批判に取り組んできたといえよう。田中氏の諸著作は本学会機関誌、日本社会教育学会学会誌でも書評が掲載され、注意が払われてきた。わが国の代表的な教育学研究者であり、産業教育史学研究者である三好信浩氏も近著において「筆者は、田中氏の主張を大筋において支持する」と賛意を示している（三好信浩『産業教育学　―産業界と教育界の架け橋―』風間書房、2020年）。

田中氏の検討は職業訓練軽視に端を発するものであり、本学会を含め、教育学界全体の問題であると思われる。かつて故・山崎昌甫氏も「職業教育を一般教育または専門教育より低く見る傾向があり、また『訓練』を教育より低くあるいは狭く考える立場がある」ことを懸念し、特に「訓練」概念に関してはヘルバルトによりながら「教育」より上位概念であることを説かれていた。田中氏の著書を読むと改めて山崎氏の言葉を思い出し、田中氏の孤軍奮闘の感を強くする。学会として問題意識を共有すべく、田中氏の主張の「エッセンス」が記された本書を一読することをお勧めする。

（ブイツーソリューション、2020年、新書判253頁、900円+税）